



視覚障害者の方や
最近読むことがつらく
なつたと感じるあなたへ

金光図書館は あなたのサポーターです。



あなたの見たい・聴きたい・調べたい
・読みたいをお手伝いいたします。

教会部長 山本 正三先生
教会部員 高橋 明代先生
図書館助手 佐藤 幸乃先生の
おすすめの本を教えてくださいました。

KONKO Library

〒719-0111 岡山県浅口市金光町大谷 320
☎0865-42-2054 fax0865-42-3134
✉ konko-library@konkokyo.or.jp
🏠 <http://www.konkokyo.or.jp/konko-library>
ブログ <http://ameblo.jp/konko-kyouco/>

対面朗読サービス

はじめました。



まずは、お気軽に
金光図書館までお問い合わせください。

Q.対面朗読サービスって何ですか？
A.図書館員やボランティアが、「目の代わり」になって、指定された資料を読むことです。

Q.目の見えない人たちは、どのようにして本を読んでいるのですか？
A.点字本でさわって読んでいますが、最近は、目次・ページ機能などがついた録音図書で、耳から聞いています。この録音図書のことをデージー図書と言います。

Q.デージー図書はどこで借りることが出来ますか？
A.インターネット上に「サピエ図書館」という図書館があります。デージー図書のデータをダウンロードして聞くことができます。自分で出来ないときは、近くの図書館から借りてもらうことが出来ます。

視覚障害者の方へのサービスの紹介でした。

利用者さんからこんな お便りが届きました。

病気で、目の中心から見え辛くなっていき、なんとか歩行はできたものの大好きだった読書ができなくなり、とても悲しかった。

そんなとき、音訳というものがあると知り、耳で本を読めるようになり、ぱっと世界が開けたように嬉しかった。

現在は、月三回の「金光新聞」のほか、月に一度の「あいよかけよ」や「教報天地」などのデージー図書を金光図書館から送っていただき、楽しみに聞かせてもらっている。

また、金光新聞の新刊案内を聞いて、読みたい本をリクエストして音訳してもらうなど、以前のように読書を楽しめ大変ありがたい。(岡山県在住 Aさん)

光風館に、図書館コーナーが出来ました。
返却BOXも設置しました。
ぜひご利用ください。



本との出会い

今回は、山本正三先生・高橋明代先生・佐藤幸乃先生
がおすすめの本をご紹介します。



教会部長
山本正三先生(横川教会)



『黒い雨』 井伏 鱒二／著 新潮社

終戦70年、被爆70年の今年、様々なメディアで特集が組まれている。戦争を体験した人たちが、この国から一人また一人と亡くなっていき、その悲惨さ残忍さを実感した人たちの言葉も消えようとしている今日、次世代に確かにその真実を語り伝えようとの思いからであろう。

私もまた、被爆地広島で育った者として、こうした年を迎えあらためて被爆の真実を聞き伝えていかなければとの思いを強くさせられた。

そうして、久しぶりに井伏鱒二作の「黒い雨」を手にとった。

この作品は、昭和20年8月6日に広島で被爆した夫婦と、その夫婦を探し歩くうちに残留放射能を浴び原爆後遺症のためにやがて死んでいく姪にスポットをあてながら、被爆当時の状況や被爆後遺症の恐ろしさ、そしてその周辺の人々の偏見なども描き出している。

私が子供の頃から聞かされていた被爆体験も、それを語る人たちが年々亡くなっていき、周囲に語る人もほとんどいない。それでも体験者達は、その時の想像出来がたいほどの惨状を思い出して、涙ながらに語る。被爆体験の風化が叫ばれるなかで、今日では被爆体験者から聞いた内容を語り伝えていく「体験伝承者」養成という営みも始まっている。

そうしたなか、作者のフィルターを通してにせよ、被爆体験者の真実の断片が描き出されていることは今更ながらに貴重であるといえる。私にとっては、主人公の「重松」が被爆したのが私の出身「横川」であり、そこから被爆日記を書き綴るといったストーリーになっていることも、この作品に思い入れを深くさせている。それは、あの8月6日に被爆し炎の中を逃げていったという祖父や叔母、さらにはその姿を探して町を探し回った祖母の歩みとも重なってくる。

たとえ、それが断片的で、その真実を語り尽くしていないとしても、後世の人たちがこの世で二度と核兵器を使用するというような愚かなことをしてはならないとの思いを駆り立てていくため、「黒い雨」という作品の負うところが大きいように思えてならない。

平和な今だからこそ、こうした書物を自由に手にして読むことができる。そのことに心から感謝しつつ、あらためて平和を祈り求めていく為に、手元からできることに取り組ませてもらわねばとの思う。



教会部員
高橋明代先生
(六条院教会)

『置かれた場所で咲きなさい』 渡辺 和子／著 幻冬舎

「置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです。『こんなはずじゃなかった』と思う時にも、その状況の中で『咲く』努力をして欲しいのです」

私がこの本、この言葉に出会ったのは、自分の居場所、生き方についていろいろ悩んでいる時でした。せつかく神様から頂いたこの命に、一番喜んでもらえるのはこんな生き方ではないかと気づかせてもらえました。それからは、「何で私がこんなところに」ではなく、「私だから与えてもらった機会」と思えるようになりました。

全体的にとってもシンプルな文章で読みやすいのですが、心にぐっときて、読み終わった時には、なんだかほっこりしている、そんな本です。悩みがある人にもない人にも、「自分が一番自分らしくいるには、よりよく幸せに生きるには」と考えさせてくれると思います。

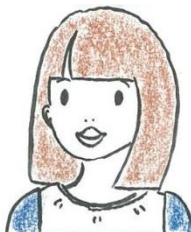


『日本文学全集 01 古事記』 池澤 夏樹／編 河出書房新社

古典を読むことは普段馴染みがない上に敷居が高く、とっつきにくいと感じられる方が多いのではないのでしょうか。

今回ご紹介する『日本文学全集 01 古事記』は翻訳と本文の下には脚註もあり、従来の堅苦しい漢文のイメージとは異なって読みやすく工夫がされています。わからない語句や意味を知りたいと思えば本文下の脚注を見ながら読み進めることも出来るし、少々のは気にならずに読み進めたいと思えばそのままとあえず読んでみて、読み進める内に生じる疑問や気になる箇所はまた前に立ち返って読むこともできます。ギリシア神話には多くの神々が登場し、冒険や諍い、人間さながらの愛憎劇を繰り広げて物語が展開していきませんが、古事記にも本当に多くの神々が登場し、天空の神々と後に天皇家の祖先神となる地上の神々の物語が紡がれていきます。

昔絵本で読んだことのあるイザナギノミコトとイザナミノミコトの「黄泉のくに」や「因幡の素兎」、浦島太郎の元になったと言われている「海幸・山幸」の神話も語られており、絵本とはまた違った世界観を読み取ることができ、新たな発見と驚きに満ちています。「古事記」の中に記された神話や伝承を通して遙かな時間を超えてこの日本に暮らした人々に思いを馳せてみるのもいいのではないのでしょうか。



図書館助手
佐藤幸乃先生
(千種教会)